

## 国際社会学部

# 松永泰行

Yasuyuki Matsunaga

国際関係コース

政治学（比較政治）



## 比較政治学とは

学部生から大学院の1年次までは人文社会系の中東・イスラーム研究をしていましたが、一念発起してアメリカの大学院に留学し、一から政治学と国際関係論を勉強しました。そのせいで、現在は、英語圏の社会科学の手法での政治学と社会科学（一般）の方法論・分析理論を主に担当しています。大学院では、留学生を対象とした Peace and Conflict Studies コースで、比較政治学・政治社会学・社会人類学の接近法を駆使した「紛争・社会変動研究」を担当しています。

政治学は、権力の問題とその影響を真っ向から研究する学問です。経済学・社会学など他の社会科学のディシプリンと研究の対象となる事象を共有していますが、世の中で起こる社会事象や出来事の解明には、権力関係の影響を無視することができないと考える点が、他のディシプリンとの違いといえます。比較政治学は、比較の視座から政治現象や権力の問題を研究することを目指すものです。

## 研究紹介

上述のように、社会科学の道に入ったのが遅かったので、社会科学的な研究業績を出すことを目指していますが、これまで発表してきた論文や出版物のレベルでは、政治学とはいえ、未だにバタ臭い中東研究をしているように見えるかもしれません。さらに最近は、比較歴史分析やフィールド調査を重視するようになり、その傾向がさらに強まっているかもしれません。しかし自分では、地域研究ではない社会科学的な「中東」研究に従事しているつもりです。

中東地域全体に興味がありますが、自らの研究対象としては、イランとイラク（とその間のクルディスタン）にとりわけ興味があります。特にイランは、最初に資料収集に出かけてから、かれこれ35年ほど経ちます。

そのイランは、1979年のイラン革命後に、宗教指導者が為政者（最高指導者）の地位を握りつつも、三権分立や大統領選挙・国会選挙も実施する「イスラーム共和国」という風変わりな政治体制を維持しています。その一方で、アメリカとの国交断絶状態も40年以上続いており、権力者と自由を求める革命後世代の若者らとの間で社会政策上の志向の乖離が目立ってきており、政治と宗教の混合だけでなく、国際政治・地域政治、抗議運動や民主化運動の観点からも大変興味深い国です。



## 担当授業

- 政治学入門
- 比較政治学
- 比較政治学演習
- 中東地域基礎
- Conflict and Social Change (大学院)

## 関連する分野

- 国際関係論
- 政治社会学
- 社会人類学
- 中東地域研究

## 出版物

- 『グローバル関係学とは何か』(共著)
- 『「境界」に現れる危機』(編著)
- 『現代中東の宗派問題』(共著)
- 『山川セレクション イラン史』(共著)
- 『現代イランの社会と政治』(共著)
- 『「イスラーム国」の脅威とイラク』(共著)
- 『中東政治学』(共著)
- 『〈アラブ大変動〉を読むー民衆革命のゆくえ』(共著)

## 国際社会学部

# 比較政治学 演習(ゼミ)

### どのようなゼミか

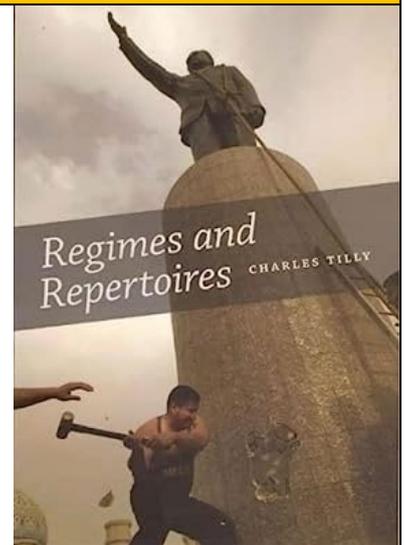
地域研究と違い、社会科学は一般化可能な知見の抽出を目指しています。ただ、研究対象とする事象や問題の固有の文脈、具体的には、歴史的・社会的・経済的・文化的な背景や関連性を一定程度知っていなければ、深い意味での実証研究はできません。したがって、東京外国語大学ならではの1～2年次の地域研究的な修学を下地とし、それらと社会科学の授業やゼミで学んだ社会科学の接近法（分析枠組みや概念等の道具）を組み合わせ、実のある探究を卒論執筆時にできるようにするために、ゼミの内容を工夫しています。

国際関係コースのゼミでは、様々な地域や言語を専門的に勉強してきた学生が集まりますので、通常は、特定の地域や国に偏ることなく、政治学や社会学の理論的文献や、様々な文脈における実証的な既存研究などを教材として使います。自ら実証的な社会科学の研究ができるようになるには、まず何事も比較の視座から眺めることができるようになる必要があります。したがって、同様の事象がいかに異なる文脈では異なる形で現れるかを学ぶことや、それらをいかに社会科学的に説明できるかを探究することが重要です。

ゼミで探究する具体的なテーマ（例えば、実践としてのポピュリズム、政党政治と投票行動の制度的・社会的な繋がり、社会的閉鎖・政治的抑圧と抗議運動の相関関係の動態など）は、集まった学生の関心分野の共通部分やその時々々の旬なトピックを考慮し、毎年、新たに選びます。その上で、選択したテーマに関わる文献（通常は研究書や研究論文などの英語文献）を集中的に読み、理論と実証の両面で参加者全員の力が向上するよう、また分析のセンスが磨かれるよう、議論を繰り返します。また狭い意味での政治学に留まらず、関連分野である社会学（政治社会学・争議政治・社会運動論）や歴史的制度論・経済学的制度論などの文献も多数読みます。

### おススメの本

- Tilly, *Regimes and Repertoires* (2006).
- Tilly & Tarrow, *Contentious Politics* (2007).
- Clemens, *What Is Political Sociology?* (2016).
- Mahoney & Ruescheneyer (eds), *Comparative Historical Analysis in the Social Sciences* (2003).
- Steinmo et al. (eds), *Structuring Politics: Historical Institutionalism in Comparative Analysis* (1992).
- Przeworski, *Democracy and the Market* (1991).



### 卒論

- What Explains the Decline of A Social Movement? A Case Study of PEGITA, the Right-Wing Populism Movement of Germany
- EU離脱とトランプ当選—ポピュリズム現象の比較政治学的分析—
- 戦後フランス政党政治における政党「国民連合」のポピュリズムへの支持拡大要因分析
- スペイン民主化と地方自治問題～カタルーニャの事例から～
- インドにおける地域主義とヒンドゥー・ナショナリズムの関係—北東インドでの展開—
- 在イラク・シーア派宗教界の公的主張と利害—コミットメント論から—
- ソビエト連邦およびロシア連邦における年金制度の変遷と未来—改革の背景を中心に—
- Migration and Settlement Patterns of the Kurdish Diaspora in Japan, From the 1990s to Today